

S: アリストテレス『ニコマコス倫理学』

東京工業大学 哲学研究会

2018年4月～9月

本冊子の概要

この冊子は、東京工業大学 哲学研究会が2018 年前期においてS：アリストテレス『ニコマコス倫理学』の読書会を行った際に、活動の記録として作成されたレジュメです。

研究会の活動記録となるほか、活動を休んだ人のフォローアップとしても利用することができます。又、今後その本を自力で読みたい人は、精読の際においてこのレジュメを最大限活動することもできるでしょう。

◆ 活動内容について

レジュメの作成者は予め本文を精読し、レジュメを作成します。レジュメは毎度の活動において内容を検討し、必要があれば適宜レジュメに修正を行います。また、活動において出た質問のうち重要と思われるものについては、Q&A も作成しておきましょう。

◆ レジュメ作成の際に使用する記号

・ で囲まれた部分
本文の引用の際に用います。

・ 「課題」と【解答】

本文の精読の際にポイントとなる部分を、問題形式で解説します。重要と思われる部分をまとめたものであり、本レジュメの主要部分といっても良いでしょう。

・ ♣ 注解

本文の解説の役割を果たしながらも、客観性の低い内容（個人の見解や、解釈の違いに対するコメントなど）を載せます。

・ Q&A

活動中に出た質問のうち、興味深いものや、重要だと思われる部分を載せていきます。

第1巻 幸福とは何か——始まりの考察

訳は主に渡辺邦夫氏・立花幸司氏（光文社古典新訳文庫）の訳を用い、引用の際は渡辺・立花訳の段落番号に従う。

第1章 行為の目的の系列から善さについて考える

まずアリストテレスは、すべての人間の営みは、必ず何らかの善を目指して為されていることを主張する。

どのような技術も研究も、そして同様にしてどのような行為も選択も、何らかの善を目指しているように思われる。

『ニコマコス倫理学』（上巻、22頁）

しかし、ここで1つ注意せねばならない。人間の行為は必ずしもすべてが道徳的な善さを目指して行われるわけではない。むしろ、人間の殆どの行為は自らの幸福のために行われるのであるし、もちろんその中には、一般的に道徳的に悪とされる行為もあるだろう。しかしそれでも、「人間のすべての営みは、必ず何らかの善を目指しているものだ」と主張してよいのだろうか？ そのような場合、「善」という言葉はどのような意味で用いられているのだろうか？

カント及びニーチェによって明らかにされた事実であるが、一般的に「よい」（英語だと good）という言葉の意味には二重の重なりがある。1つは道徳的な「善」であり、もう1つは快樂や幸福に満ちているという意味での「よい」である。

幸いにもドイツ語には、この違いを見逃さない表現がある。ラテン語学者が bonum という言葉1つで表現しているものについて、ドイツ語には二つの極めて異なる概念と、二つの異なる表現がある。bonum に対応する言葉としては善 gute と幸 Wohl という語があり、malum に対応する語としては悪 Böse と災 Übel または不幸 Weh という語がある。だから、ある行為についてその善と悪を考察するのと、わたしたちにおける幸と不幸（災）を考察するのとでは、二つのまったく異なる判断なのである。

イマヌエル・カント『実践理性批判』（中山元訳）段落 088

彼らの道徳の系譜学の拙劣さは、「よい」という概念と判断の起源を確認しようとする最初のところから、たちまち露呈してしまうのだ。

……結論を出そう。『良いと悪い』と『善と悪』という二つの対立する価値評価は、数千年に及ぶ恐ろしい戦いを地上で繰り広げてきた。

ニーチェ『道徳の系譜学』（中山元訳）
第一論文「善と悪」と「良いと悪い」より

♣ 注解 1 カント・ニーチェ共に、これらの二つの概念を相反するものとして捉えている（二人とも主張の根拠はまったくことなるのであるが）。なお、ニーチェがカントを愛読していたとは到底考えられないので、彼らはそれぞれ独立してこの事実気づいたと考えるべきであろう。

この「幸福・快樂」と「道徳的善」の2項対立は倫理学において1つの大きな問題であり、いずれはアリストテレスもこの問題について詳しく検討するであろう。しかし、現時点では彼にとってこんな問題などどうでも良かったと思われる。彼がここで問題にしているのは、「善」という言葉を、倫理学に必要な範囲で説明することであろう。そして、それを考察する為のきっかけとして、「私たち人間の活動は、何らかの善を目的とするものだ」と主張しているのである。

そうであるとするならば、このような目的〔最高善〕を知ることは人生にとっても重大なことではないだろうか。

『ニコマコス倫理学』（上巻、26頁）

課題 1 第1巻冒頭における「善」はどのような意味で用いられているのか。

【解答】 本文における人間の営み一般は、道徳的に善い行為のみならず、一般的に道徳的に悪とされる行為も含まれるだろう。しかし、道徳的に悪い行為であっても、それはやはり何らかの目的があって為されているのであり、そういう観点からすればそのような目的も「善」なのである。

ただし、このような意味での「善」を、道徳的な善さという意味で解釈するのは、明らかに間違いである。よって、ここでの「善」は、必ずしも道徳的なものではなく、たんに「欲している」「利益になる」という意味で用いられていると捉えるべきである。そして、アリストテレスはこの素朴な地平を出発点として、道徳の問題について考察を深めていくのである¹。

さて、このような人間の営み一般は、大きく二つに分けることができる。一つは、行為そのものが別の行為の手段ではなく、直接目的を伴う場合である。たとえば、遊び一般はこの行為にあてはまる。「音楽を聴く」という行為は、何か他の行為のための手段として行われるものではない。行為自体が「楽しみのために」という目的を伴うのである。

¹菅豊彦『アリストテレス ニコマコス倫理学を読む』P37より。

もう一つは、行為が、それを超える別の目的のためになされる場合である。本文では、「馬勒をつくる技術」がその例として挙げられている。この技術は「馬に関する技術」の諸部分として束ねられる。さらに「馬に関する技術」は「戦争術」という一つの技能のもとに束ねられるのである。

課題 2 「このことは、活動そのものが行為の目的である場合にも、あるいはちょうどいま述べた学問のように活動とは別の何か为目的である場合にも、何ら違いはない」とあるが、これはどういうことか。

【解答】 例えば「テニスをする」という行為には、それ自身が「楽しみのために」という「目的」を直接伴うが、一方で、テニスのルールを熟知していることや、ラケットの使い方に慣れていることなどの「技術」も伴っていなければならない。

このようにしてアリストテレスは、人間の営みには、その営みが従える「技術」と、営みの「目的」がそれぞれ伴っていなければならないと考える。そしてそのような場合、より下にある技術の目的よりも、上にある技術の目的の方が好ましいと考えるのが自然であり、このことは、「活動そのものが行為の目的である場合にも、あるいはちょうどいま述べた学問のように活動とは別の何か为目的である場合にも、何ら違いはない」のである。

第2章 政治学と倫理学

第2章では、すべての行為の究極的な目的である、最高善についての議論がなされる。ところが、本章においてアリストテレス本人は、この最高善の存在を、たんなる推測にとどめている。というのも、この時点において最高善の存在を前提とするのは、明らかに論理的に不十分だからである。内容について検討する前に、まずはその点から確認していこう²。

課題 3 第1章から第2章にかけての議論は、「いかなる行為にも、その究極的目的がある」という前提から、「一つの究極的な目的を目指して、すべての行為がなされる」という結論を引き出している」と解釈できる。このとき、この推論は論理的に不十分であることを指摘せよ。

【解答】 $F(xy)$ を次のように定義する。

$F(xy)$: x は y を究極的目的とする

このとき、前半「いかなる行為にも、その究極的目的がある」は以下のように表現される：

$$\forall x \exists a F(xa)$$

一方、結論「一つの究極的な目的を目指して、すべての行為がなされる」は以下のように表現される：

$$\exists a \forall x F(xa)$$

²次に示す課題は飯田隆著『言語哲学大全 I』第一章を参考に作成したものである。

このとき、明らかに以下の推論は誤りである。

$$\forall x \exists a F(xa) \implies \exists a \forall x F(xa) \quad (\text{誤り})$$

それゆえ、ここにおけるアリストテレスの推論は、論理的には不十分である。

♣ **注解 2** もちろんこれは、アリストテレスの主張そのものが完全に間違っていることを指摘するものではない。むしろ、彼はこの推論が不十分であることを積極的に認めているし、それに加えて、彼は後に「最高善は1つとは限らない」ことを積極的に認めている。

……したがって、もし人間のなしうるあらゆる事柄に何か1つの目的があるとするならば、そのひとつの目的がなしうる善であろうし、そうした目的が多くあるとするならば、それらがなしうる善であろう。

『ニコマコス倫理学』（上巻、52頁）

話を戻そう。アリストテレスはここで最高善を扱う学問として「政治学」を挙げているが、ここで政治学は広義の政治学であり、現代でいう政治学と倫理学を合わせたものと解釈すべきである。

課題 4 ニコマコス倫理学は表題の通り倫理学を扱う書であるが、彼は本章で最高善を扱う学問は、倫理学ではなく政治学であるべきだと主張する。それはなぜか。

【解答】 政治学は、人間のさまざまな技能や知識を束ねる学問であり、さらには「人々が何をなし、何を避けるべきか」を定める学問である。そして、その目的は人間にとっての善である。そのような点で、最高善を扱うのは最も権威のある学問、すなわち最も統括的な学問としての政治学であると考えられる（そして、本書の研究はこの「最高善」の探究を目的としているのであり、そのような点で倫理学と政治学は地続きとなっているのである）。

♣ **注解 3** アリストテレスは『政治学』³において、ほんらいの（広義の）政治学の目的は「人間にとっての善」、すなわち、国民がよい生を送ることにあると考える。そして、ポリスの役割は国民が人間として最高の生き方を実現することにあると考える。そのような意味で、本来個人にかかわる倫理学は政治学の基礎となるものであり、そのような意味で倫理学は一種の政治学とみなすことができるのである。

それでは、ここにおける「最高善」とは具体的に何を指すのであろうか？ それは本巻第4章で述べられるが、eudaimonia（幸福・エウダイモニア）と呼ばれ、以後の議論において大きなテーマになる。

³ 『ニコマコス倫理学』の終盤は「幸福」についての総括と実践的・国家社会的観点で提示されており、そのような意味で『政治学』への接続を匂わせた締めくくりとなっている。

第3章 受講の際のポイント

第3章、第4章はほかの章と比べてやや方法論的な内容が述べられている。まず彼は、学問に要求される厳密さの程度は、それぞれの学問に応じて異なると主張する。というのも、学問ごとに、論述が明確であるとされるレベルが異なるからである。たとえば、代数学や幾何学には高い厳密性が求められる一方で、弁論家は自説の主張に対して厳密な論証を求められる必要性を免れるのである。

また彼は、倫理学において若者は聴講者として相応しくないと主張する。彼はその理由として二点を挙げる。一点目は、若者は人生における様々な経験において未経験であるが、倫理学における論述はこれらをテーマとして扱う学問であるからである。二点目は、若者は感情に従いがちであり、しばしば理性的で正しい判断を見失いがちであるからである。

第4章 倫理学の目的である eudaimonia は、人々の激しい論争の目的である

さて、それでは「最高善」とは具体的にどのようなものなのであろうか。アリストテレスは、その呼称については大方の人々にとって意見は一致していると述べる。それは eudaimonia (エウダイモニア・幸福) である。

eudaimonia は日本では一般的に「幸福」と訳されるが、そのニュアンスは「幸福」と若干異なることに注意せねばならない。幸福のように人々の感情を示す表現よりも、むしろ人々が目指す「最高善」のイメージの方が eudaimonia のイメージに合致していると言えよう。この「最高善」と「幸福」を結び付けるアリストテレスの思想は、以後の西洋倫理思想に大きな影響を与えている⁴。このことは、「最大多数の最大幸福」を主張する功利主義や、人々の持つ道徳性に正確な比率で幸福が配分される状態を最高善と定義するカント倫理学にもうかがえる。

問題は、一口に「幸福」といっても、それが具体的に何であるかについて、人々の意見が大きく分かれることである。彼は、この点においてすべての人々の意見を聞き入れることは徒労だけで、何の利益ももたらさないと考える。そして、この場合、最も普及しているか、あるいは一理あると思われる見解を検討すれば十分である、と主張する。

課題 5 「原理から出発する議論」と「原理へ向かう議論」が異なるとはどういうことか。また、彼の倫理学はどちらの方法を採用するのか。

【解答】 「原理から出発する議論」は、たとえば数学のように、公理系、つまり誰もが即座に認めるような普遍的原理（「限定抜きによく知られた事柄」）から議論を出発させ、そこから個々の事例を論証していくような議論である。一方、「原理へ向かう議論」は、学者や賢者など声望ある人の意見や、人々の常識、言葉の慣用の知識等を含めた「我々にとってよく知られた事柄」から議論を出発させ、原理を探究するような議論である。

⁴菅豊彦『アリストテレス ニコマコス倫理学を読む』P41 より。

倫理学の議論はこのうちいずれか一方に厳密に定まるわけではないが、おおむね後者にあてはまるであろう。

課題 6 前章でアリストテレスは若者は倫理学の聴講者として相応しくないと考えたが、その背景には彼の倫理学に対するどのような考えがあるか。

【解答】 まず彼は、倫理学は理論ではなく実践に関する学問であるため、聴講者は学問的説明を受けて、その結果実際に自分の行為と生き方を向上できるのでなければ、講義を聞いてもその意味は無いと考える。それゆえ、すでに善い行動や生活上の判断がある程度出来るようになっている聴講者のみが、彼の講義を受講することにより、今までの自分の行為や判断を、学問的に基礎づけて理解でき、血肉化することができるのである。

2点目に、彼は、倫理学は「われわれにとってよく知られた事柄」から議論を出発すべきであると考える。つまり、倫理学は「原理へ向かう議論」から出発すべきだと考える。それゆえ、倫理学の扱う話題についてちゃんと聴講しようとするならば、聴講者はすでに習慣によって立派に躰られていることが要求される。よって、経験未熟な聴講者は倫理学の探究には向いていないのである。

Q. 課題6の2つの内容は、本質的には同じ内容ではないでしょうか？

確かにその通りだと思いますが、記述の視点（アスペクト）が違うと思います。それゆえ、確かに1つにまとめてもよいのですが、内容を分かりやすくするためにも、本レジュメでは分けることにします（倫理学ではこのように視点によって記述の仕方が変わってくることはよくあると思います）。

第5章 代表的な3種類の生き方の検討

第5章では、第4章において人々の論争的になるとされた「幸福」の正体について、代表的な3つの生き方を通じて検討がなされる。

♣ **注解 4** この3分類の区別は、プラトン『国家』第4巻で論じられている三種類の階層「大衆階層」「補助者（戦士）階層」「支配者階層」に対応したものと思われる。

まず、一般大衆は幸福を快樂だと考え、「享樂的な生活」を愛好しているとアリストテレスは考える。しかし彼は、そのような大衆の生き方にはそれなりの「理由はある」と認める一方で、彼らを「家畜が送るような生活を選んでいて、まさに〔欲望の〕奴隷のようだ」（1095b20）と批判し、「享樂の生」を「幸福な生」から除外する。

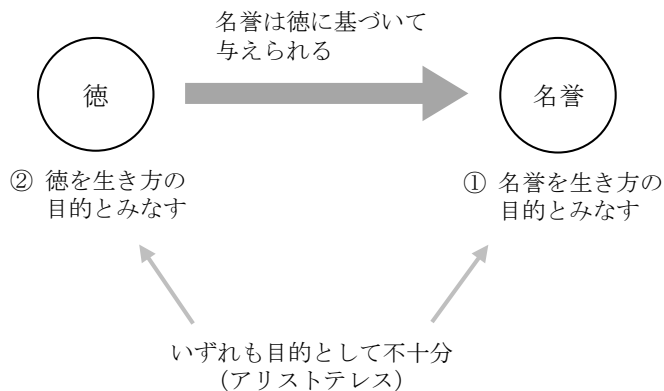
次に、立派で行動力のある人々は、「名誉が善や幸福だ」と理解していると彼は考える。

課題 7 アリストテレスはなぜ「政治的な生活」は生き方の目的として完璧とは言えないと考えるのか。

【解答】 まず、彼は、政治的な生活を目的とする人々が求める「名誉」は、それが与えられる側の人々よりも、むしろ与える側の人々に依存していることを指摘する。しかし、善というものは、それを持つ人に固有な何か（奪い取ることができないもの）であるべきであり、他人に依存するようなものであってはいけないと考えるのがよりふさわしいと彼は考えるのである。

2点目に、彼は、政治的な生活を目的とする人々が名誉を求める理由は、自分たちが優れた人間であることを確信するため、つまり、自らの徳を確認するためであることを指摘し、そのような意味で、彼らは名誉ではなく徳そのものをより善いものとして認めるはずだと考える。つまり、政治的な生活の目的は、実は名誉ではなく徳なのだとは彼は考える。しかし彼によれば、徳も生き方の目的として完璧とは言えないのである。というのも、人間は徳を持っていても最大の苦難を受けたり、この上ない不幸に見舞われたりすることがあるのであり、それゆえ「徳」と「幸福」は同一視できないからである。

♣ 注解 5 課題7におけるアリストテレスの推論は、次のように解釈することもできよう。まず、名誉を求める人々は、必ず「何らかの徳に基づいて」名誉を欲しているはずである。すると、その「徳」が生き方の目的となる主張根拠として、次の2つが考えられる。①名誉が目的で、徳はそれを得るための手段である。②徳が目的で、名誉は自らの徳を確認する手段である。しかし、①は他律的であるために、②は徳だけでは幸福にはならないが故に、結局、名誉・徳のいずれも、完璧な目的（幸福）とはいえない。



Q. 課題7の「徳」は、具体的にどのような意味で用いられているのでしょうか？

上巻の解説P.441は次のように記してあります：「ギリシャでは、『知恵、勇気、節制、正義』という4つの代表的な徳が語られ、そのほかにも十数の徳が称賛され、教育の場面でも称揚されていました。」しかし、解説のその後の文章にもあるように、具体的な解釈は現在も大きく分かれているようです。

Q. 課題7におけるアリストテレスの後半の主張には、「徳の方が名誉よりも善い」という前提がありますが、これは本当に正しいのでしょうか？

その疑問は正しいと思います。確かにアリストテレスは「[立派で行動力のある人々が] 名誉を追求するのは、自分が善い人間であると確信したいためであるようにも思える」(1095b27)と主張し

ていますが、中にはそうではなく、ただ「なんでもいいからとにかく名誉が欲しい！」という人もいるはずですが（そして、それはそれで自然なことだと思います）。

しかし、だからといってアリストテレスのここでの主張が意味を失うことはないと思います。というのも、♣ 注解 5 の解釈に従えば、そのような人間への彼の批判は①に該当するものであり、これで事足りています。むしろ、名誉ばかり求めている人間は、そもそも②に該当しないのですから、議論の後半部の主張と無関係であるのは、ある意味当然なことです。

第6章 イデア論批判

プラトンは、この世の感性的な個物を超越した、絶対的な永遠の实在として、善のイデアを設定する。プラトンによれば、この世における「善きもの」はすべて、善のイデアに基づいて「善い」と語られるのである。しかし、アリストテレスはそのようなプラトンの考えを退ける。彼は、倫理学においては、プラトンのような理念に基づいた方法論ではなく、あくまで現実的な観点から議論を進めようとするのである。

♣ 注解 6 以後の議論において、プラトンの「善のイデア」と「最高善」は、それぞれ別物として語られていることに注意されたい。プラトンの「善のイデア」は、現世を超越した普遍的なものとして想定される一方で、「最高善」は、(まだその正体が解明されていないとはいえ) より現実的なものなのである。

課題 8 プラトンの「善のイデア」に対するアリストテレスの批判の前半部分（46 頁 1096b9 まで）について、批判の根拠をまとめよ。

【解答】 批判の内容は3点に分けられる。1点目に彼は、イデア論者の主張に従えば、「前後関係が語られるもの」（例えば数など）についてはイデアは存在しないことを確認する。ところで彼は、善という用語は、「何であるか」（実体）、「どのようなものであるか」（性質）、「何かに対して」（関係）など、様々な意味において語られることを確認し、そのうえで、「実体」の方が本質的であり、「性質」「関係」は派生的なもの・付帯するものにすぎないことを主張する。それゆえ、「善」という用語の意味の違いには前後関係があるために、それらを一挙に取りまとめる共通のイデアなど存在しないことが導かれる。

2点目に彼は、「善い」という言葉は「ある」という言葉と同じだけ多くの意味で語られる、という興味深い主張を行う⁵。つまり「善い」という用語は「ある」という用語の種類——つまり、カテゴリーの種類——に依存して、それと同じだけ多くの意味で語られると主張する。するとこのとき、明らかに善は、普遍的な何か唯一のものとして語られることはなく、それゆえ、それらを取りまとめるものとして語られる「善のイデア」も存在しないことになる。

3点目に、たとえば、「人間そのもの」と「人間」はどちらも人間に対する同一の説明として語ることができることや、「永続的な白さ」と「一時的な白さ」はどちらも白いという点で違いはないことを挙げ、同様にして、「善そのもの」も「善」も、「善である」という点においては何ら違いはない

⁵ 「ある」という言葉に多くの意味があることについては、『形而上学』第7巻を参照されたい。

ことを主張する。するとこのとき、アイデア論者たちが「善のアイデア」という用語でいったい何を主張したかったのか、分からなくなってしまうのである。

♣ 注解 7 1点目の批判については、次のように説明してもよいだろう。命題 A , B を次のように定義する。

A : 「善のアイデア」が存在する。

B : もろもろの善には、前後関係がない。

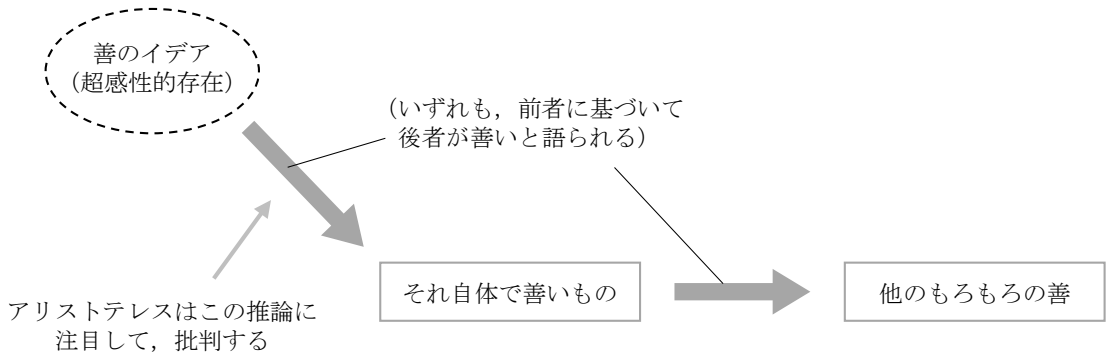
このとき、以下の推論は（形式的に）正しい (Modus Tollens)。

$$\frac{A \rightarrow B}{\sim B} \quad \frac{}{\sim A}$$

（ここで、 $A \rightarrow B$ はプラトンのアイデア論に従ったものであり、 $\sim B$ はアリストテレスの独自の主張に従ったものである。）それゆえ、結論 $\sim A$ が導かれることになる。

次に、アリストテレスは、このような彼の主張に対抗した、もうひとつの異論を想定する。それは、次のようなものである：

「アイデア論では、すべての善が『善のアイデア』に基づいて語られるのではない。善は (1) 『それ自体で善いもの』と、(2) 『それ自体で善いもののゆえに善いと語られるもの』の2つに分けることができるが、そのうち (1) にあてはまるもののみが『善のアイデア』に基づいて語られるのである。」



それでは、これに対するアリストテレスの再反論について確認しよう。

課題 9 プラトンの「善のアイデア」に対するアリストテレスの批判の後半部分（47頁 1096b16 から）について、批判の根拠をまとめよ。

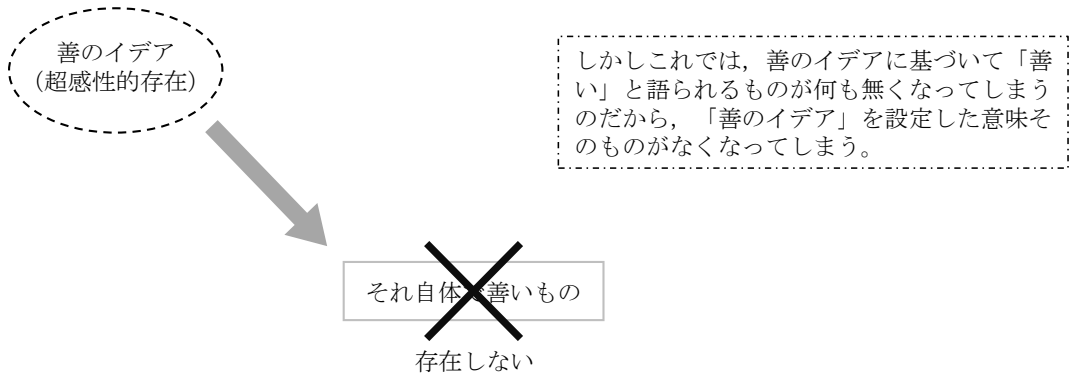
【解答】 アリストテレスは上の異論における「それ自体で善いもの」に注目する。この「それ自体で善いもの」の正体については、以下の二つの選択肢がある。①「それ自体で善いもの」など存在

しない。②「それ自体で善いもの」とは、他と切り離されてもそれだけで追求されるもののことである。具体的には、快樂や名誉といったものがそれである。

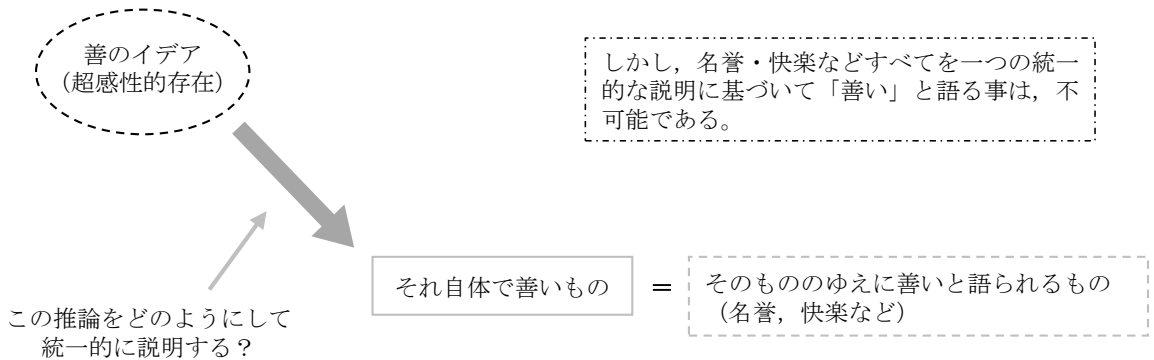
しかし、①の場合には、そもそも「それ自体で善いもの」が存在しないのだから、それを根拠づけるものとしての「善のアイデア」を想定することも無意味になってしまい、おかしい。一方、②の場合には、快樂や名誉といったものを善いと認める統一的な説明は不可能であるため、これもおかしい。

以上から、この「異論」に対する彼の再反論は終了する。

①「それ自体で善いもの」は善のアイデア以外に存在しない



②「それ自体で善いもの」は善のアイデア以外にも存在する



最後に彼は、「善のアイデア」の正体・あるいはその存在の有無について議論するのは、少なくとも本書においては本質的ではないと主張する。

同様のことが、善のアイデアについても当てはまる。というのも、もし〔さまざまな善いものに対して〕共通して述べるができる或るひとつの善があるとしても、あるいは、それ自体であるものとして他から独立してありうるような或る一つの善があるとしても、それが、人間がなしうる善でも、人間が獲得できる善でもないことは、明らかだろう。そして、いま探求されているのは、こうした人間が獲得できてなしうる何かなのである。

『ニコマコス倫理学』(上巻, 50頁)

冒頭の一文を思い返そう。「どのような技術も研究も、そして同様にしてどのような行為も選択も、何らかの善を目指しているように思われる」。ここで彼が想定している善は、行為・選択の目的としての「善」であり、すなわち人間的な善なのである。そして、この目的について（倫理学に必要な範囲で）知ることがアリストテレスの倫理学の目標であった。それにもかかわらず、これに加えて超感性的な存在としての「善のアイデア」などという形而上学的な想定を行ったところで、何の意味があるろう。

「人間の行為・選択の究極的な目的」を「最高善」と想定し、それを概略的にも把握することを倫理学の最大の目的ととらえる彼の考えがプラトンの着想から生まれたことは確かである。しかし、彼は形而上学的なアイデア論にしがみつくとなく、あくまで現実的な観点から議論を進めようとする点で、師匠プラトンとは異なる道を歩むのである。

♣ 注解 8 ただし、彼が善に関する形而上学的な議論を全く無意味だと考えていたかということ、そうではない。彼は、それに関しては、少なくともここで述べるような事柄ではないと主張しているにすぎない。なお、49頁の「別の哲学」とは、『形而上学』で論じられる「第一哲学」だと考えられる。これは、ある不動の実体（神）を対象として、存在一般の根本原理を研究する学問である。当然ながら善についてもこの学問の対象になると考えられるが、ここではこの議論については一切触れないのである。



第7章 幸福の定義「徳（アレテー）に基づく魂の活動」

前章において「善のアイデア」にまつわる議論を、いま扱っている倫理学すなわち『ニコマコス倫理学』にはそぐわないものとしてひとまず切り上げたアリストテレスは、ここで行為・選択の目的としての善にまつわる議論に話を戻し、それを完結させる。だいいちに、最高善とは完結した目的⁶、すなわちそれ自体として選ばれ、他のもののために選ばれることがけっしてないことがらであるとす。そして、そのような完結した目的である最高善とは、幸福に他ならないと述べる。

課題 10 渡辺・立花訳注 4 において「それで完結した」という訳が典型として挙げられる形容詞 *teleios* の意味は、神崎繁訳『ニコマコス倫理学』によると、「完全な」または「最終の」の二者に大別される。古典ギリシア語原文において同形容詞が用いられていると考えられる部分を手元のテキストにおいて指摘し、それぞれの意味としてより適当と思われる側に分類せよ。

【解答】 渡辺・立花訳上巻、54 頁 2 行目「あらゆるものがそれで完結した目的となるわけではない」の中の「それで完結した目的」の意味は「最終の目的」と解釈したほうがより簡明である。すなわち、あるものを「最終の目的」と呼ぶのは、もろもろの行為と選択のあいだにある「A は B を目的とする」という関係について、そのものが A の位置に現れるならば B の位置にはそれ自身以外のものが現れることがありえないようなときであると分析可能である。

章全体を見ると、形容詞 *teleios* およびその名詞的用法はすべて「完結した」「完結したもの」と訳されているが、上に挙げたもの（これはじつは本章における同形容詞の初出である）のほかは、どれも「完全な」という意味に取るべきである。なぜなら、テキストの中で「いっそう完結したもの」の定義がなされているが、そこで強調されているのは順序関係としての分析にとどまらず、「それ自体として追求される」という人間的・実践的な価値があるということだからである。

最高善である幸福についてよりくわしく述べていく中で、次第に「完結した *teleios*」に独自の意味付けが加わっていくという議論の展開を考慮すれば、以上のように意味の重点が移っていると解釈するのが妥当である。

また、完結した善は自足的であるという前提のもとに、幸福が自足的、すなわち「それだけで人生を望ましくし、また何も欠けていないものにするもの」であるということの説明をおこない、最高善とは幸福であるという主張を補強していく。

♣ **注解 9** ここでいう自足的とは、国家（ポリス）の成員たる「ポリスの動物」＝人間にとって自足的であるということが強調される。この観点からも、人生全体における幸福という時間的観点とならんで、幸福 *eudaimonia* とたんなる快樂とのあいだの明確な違いが説明できよう。

課題 11 幸福が「すべてのなかでもっとも望ましいもの」であるのが、「それ以外の事柄と同列に同列に並べられるものとしてではない」とはどういうことか。

⁶ 注解 ?? において引用された、まさにその箇所を見よ。アリストテレスは、完結した目的とは 1 つに限らないことを、ここでは明確に述べている。

【解答】 幸福と特定の幸福以外のものとの二者をある数に対応付け、これらの二者がまた二つの数同士を足し合わせた数に対応する、という「加算性」を満たさないということである。神埼訳では「他のものと一緒に数え入れることのできないもの」とされる箇所であり、「非加算性」と呼ぶことができる。また、「自足性」はさらに「通約不可能性」をも要求する。以上の二つの解釈は両立するものである。いっぽうで、それぞれの価値が「非加算性」および「通約不可能性」の両者の逆の性質、すなわち「加算性」「通約可能性」の双方をみたと仮定した上で「功利計算」をおこない、その何らかの条件で計算された数を最大化する状況がもっとも望ましいとするのが功利主義である。

課題 12 幸福は完結した目的かつ自足的なものでありうるのか、批判せよ。

【解答】 アリストテレスの言う「完結した目的」には、すべての最終的な目的を含んだ完全な目的という意味での「包括的 inclusive 目的」と、あらゆる最終的な目的たちのなかでもっとも尊ばれるべき目的という意味での「支配的 dominant 目的」とで二つの解釈がある（神埼訳参照）。ここで、前課題をふまえると、前者の「包括的目的」は、「自足性」のうち、特に「通約不可能性」に矛盾するようにも思われる。もちろん両条件を踏まえた上で整合的な解釈をすることも可能だが、以上のように「完結した目的」と「自足性」の解釈を選ぶと、それらは両立しえないという批判はありうる。

さて、ここまでで幸福が最善のものであることがおおよそ結論付けられたとして、幸福とは何であるのか明確に述べる段階に移っていく。アリストテレスはこの章において、『ニコマコス倫理学』最大のポイントの一つである「徳に基づく魂の活動」という幸福の定義を打ち出す。その過程においては、まず、よさや立派さの属するところが「はたらき」にあるという論点がある。そして、人間自身（分解された人間の手や足やと言った部分ではないひとりの人間全体ということ）の善というものを考えるために、人間という「種」そのもののはたらきを把握しようとするのである。そのはたらきにおいて（はたらきという論点の中で）すぐれた（美しく立派に）仕方になしとげるような「すぐれた人」について、その人が「すぐれた人」であるゆえんを固有の「卓越性 アレテー」に基づくとする。

課題 13 テキスト中の「キタラ奏者」の例を用いて、医術にすぐれていない人間（「ふつうの医者」）A 氏と医術に優れた人間（「名医」）B 氏とのあいだで、それぞれについて共通して語られる「類」、その類としての「徳」「卓越性」「はたらき」、そして「類として善か否か」「人間として善か否か」を比較してまとめよ。

【解答】 A 氏、B 氏について、両者はともに「医者」について語られる。すなわち、類「医者」は A 氏、B 氏両者に共通する一つの本質あるいはあり方を示している。

その類、すなわち医者としての徳については、A 氏は持ち合わせているとは言えないが、B 氏は持ち合わせていると言える。

医者としての卓越性についても同様に、A 氏は持ち合わせておらず、いっぽうで B 氏は持ち合わせている。

それぞれのはたらきは、テキストにしたがえばふつうの医者 A 氏は「患者を治すこと」であり、B 氏は「患者をよく治すこと」である。

「類として善か否か」、すなわち医者として善か否かについては、A氏は善とは言えないが、B氏は善である。

「人間として善か否か」については、両者ともに以上の分析からは答えが出ない。

課題 14 この章で得られた、善に関する「原理」とはなにか。また、この原理とはどのようにして得られたもので、どのように用いられるものなのか。本文に即した形で説明するとともに、この原理の根拠および応用の具体例を与えよ。

【解答】 幸福の定義「徳に基づく魂の活動」が、善に関する原理である。いままでの議論は「一般によく知られたことがら」から「原理へと向かう議論」であった。そして、倫理学の実践的な性格から、いったん原理が得られたとして、その原理を絶対的な公理のように扱うというよりは、その原理から細かい状況における実践につなげるという形で用いられるべきものである。